

## 第7回連合父母会文学賞

### 阿久悠作詞賞受賞作品について

飯田久彦

阿久悠作詞賞に、今回は昨年を上回る78篇の応募がありました。ともすれば、言葉の劣化が指摘される時代、頼もしいことだと思えます。今回は、従来の自由作詞形式に加え、初の試みとして、作曲家・大隅知宇おおすみともたか氏の作った課題メロディーに詞を付ける課題曲作詞形式の2本立てで募集しました。メロディーが先にある新方式に、明大生の皆さんが積極的に挑戦してくださったのも嬉しいことでした。

しかし、今回は残念ながら自信を持って大賞に推せる作品に出会うことができませんでした。タイトルや出だしの数行でグッと聴き手の心を掴むのが歌だと思えます。そんなパワーが今ひとつ稀薄に感じられました。どの応募作もそれなりによく出来ていて、駄作などひとつもないのですが……。

歌は時代の飢餓感をキャッチすることから生まれる——と、阿久さんはよくおっしゃっていました。いま社会に何が欠如しているのか、いま何が求められているのか、人々が潜在的にいただいている飢餓感を鋭敏に感じとり、3～4分間のドラマにすることが、作詞なのだ——と。

今回の応募作は総じて、未来への不安感を漠然と語るものが多かった印象があります。おそらく、それが2015年の時代の空気なのでしょう。それならば、その空気の元にあるものは何なのか、それをどうやったら打開できるのか、もう一步踏み込んでドラマを創作してはどうだろう……、応募作を拝見しながら、そんな思いがありました。若い世代だけでなく、私たち皆が、作詞とブログの違いを真剣に考える必要がありそうです。